

ジョシュ ハサン 米国出身の元ユダヤ教徒

:

明:「真理の探究者」によるイスラ ム への道のり。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 男性](#)

より: ジョシュ ハサン

日 03 Aug 2015

集日 03 Aug 2015



私はムスリムにならなかったかも知れません。14,321もの神々を崇 するヒンズ 教徒になっていた可能性もあります。

または、イエス キリストを崇 するキリスト教徒になっていたかも知れません。しかし、なぜ自らを神であると主 さえしなかった 言者を崇 しなくてはならないのでしょうか

。彼は知っていたはずですが。そして私も知っています。イエスは神ではなく、神はイエスではないのです。

教徒になっていた可能性だってあります。しかし、どの宗派が正しいものなのでしょう？ それを知る人すらいるのでしょうか？

ダライ ラマは「3人の娼を れてラスベガス旅行をする」と 言したように、私に人生を 歌する教えを くことを好んだのでしょうか？

上の宗教のいずれにも正式に入信したことはありませんし、これからもそうすることはないでしょう。私はイスラ ムのことを殆ど知らないまま、その方向に みました。そしてその1年、シャハ ダをして改宗しました。もっと早く改宗していればとさえ思います。これは私が10 のときから始まる、私の改宗 です。

唯一神

10 の、 は私をユダヤ人口の多い地元マサチュ セッツ州ブルックラインの正 派シナゴ グに登 しました。そこでヘブライ とユダヤ教を学ぶためだったのですが、どちらもろくに学ぶことはできませんでした。その教 はイスラエル人でした。あまり良くは えていませんが、 彼らはもっぱら改革派のユダヤ教を教えていました。10 の私は真 に神を信じており、ト ラ と旧 の物 をよく み、 よりも「敬虔」でした。私は礼 したりはしていたものの、なぜか家族や友人たちは全くその重要性を理解していませんでした。それにも わらず、私は内なるユダヤ性を大事にしました。その 期に、私はキリスト教についてすこし ってみたことがあります。なぜ人々がキリストという 大な人物の名前を、何か起きた に安易に使うのかが疑 でした。またイエス キリストにはもっと敬意が われるべきではないのか、そして彼は本当に神の子なのかを疑 に持ちました。

そしてまだ10 だった のある日、私がユダヤ教やイスラエルについての をしていると、新たな宗教を しました。まず三日月と星のシンボルが目に入りました。さらに み めると、世界中にいるその宗教の10 人もの人々が私と同じ神を崇 しているのを知り、 愕しました。思い起こすと、それは本当に信じ いことでした。全能なる神アッラ の宗教イ

イスラムの追者たちは、クルアーンと呼ばれるものをみ、巡礼をしたのです。それは至味をそそりました。

残念ながら、当時はイスラエルへの近感から、さらにイスラムについて勉強することはばかれました。私はムスリムたちが、ダイナマイトでユダヤ人たちを吹き飛ばすテロリストだと洗われていました。ユダヤ人たちは「善良」で、アラブ人たちは「」だったのです。友人たちはそう言い、教団たちもそれを示唆しました。そして1999年まで、イスラムについては殆どなくなりました。

1994年明け、1995年となりました。家族はシナゴグや宗派を更しました。彼らは正派から「改革派ユダヤ教徒」に改宗したのです。私たちは非常にリベラルになりました。私たちの「ラビ」はコシェルですらなく、彼はユダヤ教徒を神の道へとく精神的指者とは言いにくい人物でした。ある夜の集会で、彼は私たちの眠りをまそうとして、近所のボストン大の女子学生をみだりに眺める趣味について言及しました。そのときはかな笑いしか取りませんでした。いま当を思い起こしてみると、彼は自らの妻、トラ、そして神の御前で「ハラム（禁忌）」について語っていたのです。ユダヤ教にする不は高まり、宗教右派への移りは必然でした。ただし、正派ユダヤ教徒にだけはならないとめていました。

典の民

私はキリスト教のスピリチュアリズムに共感をえていました。それが力いものだと感じていたのです。ユダヤ教が腐した宗教であることは信じていたものの、依然として神だけは信じていました。ひょっとすると、キリスト教徒たちは本当に神を信じているかもしれないと思いました。

合同礼に赴き、者としてみましたが、イエスに神格性があることだけはどうしても信じてできませんでした。それゆえ、理やり信じむことにしました。私は「御子」へ祈っていたのです。とんでもないことをしていました。ひたむきにってはみたものの、それにする答えはありませんでした。理解することができないまま「教理答」

を学び、「主の祈り」を捧げていました。まだ洗礼されてはいなかったので、カトリックではありませんでした。カトリック教徒になるには、9ヶ月の学びが必要とされます。者が私への洗礼を拒否したため、カトリックになる前に死んだとしたらどうなるのでしょうか？

私はキリスト教の教の欠ばかりに目が行くようになりました。者たちもそれらに付いてはいたようでしたが、それにもわらず教をけていました。

1999年の1月26日、私は信礼のクラスを辞めることにしました。私はまだキリスト教徒でもなかったのですが、キリスト教を辞めました。私は「救」されなかったことになりませんが、にも留めませんでした。はそれをとても喜びました。ただ、私は唯一神の存在を信じけていました。今日でも、それがいかにすぐ起きたかにかされます。教会を去って一もしないうちに、神の「最宗教」について学ぶことになったのです。

恐ろしいほどの延

父は私のキリスト教にする味の矢に喜し、手をげて迎えました。しかし彼にとってのいことに、彼は私をへれて行きました。そこで私はブリタニカ百科事典を介されました。その中でムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）についてんだのです。その事では、彼がアラビア半のユダヤ部族を虐したとされてきました。それをんだ私は深く悲しみ、怒りと混乱が同居した感情にとらわれました。私はこのイスラムの言者がユダヤ教徒を虐したことに、どうすればよいのか分からない感情と共に慨しました。イスラムを除外したものの、神を信じけていました。もうりはできない状態でした。ユダヤ教とキリスト教が腐していることは知っていました。ブリタニカ百科事典も腐しているにいないと感じました。

そのため、地元のモスクを探すことにしてみました。偶然、近所にモスクがあるのをしました。インターネットでも索しました。ボストンという文字を目にすると、すぐさまマウスをクリックし、正しく神を崇する道へとくものが見つかるよう望みました。ゆっくりと反のいモデムに忍耐く待ち、遂にサイトがきました。

マウスのボタンをクリックすると、アッサラ ム アライクムという挨拶に迎えられました。住所をメモし、 画を立てました。ボストンでモスクをつけることができた私は、エジプトやヨルダン、イエメンまで旅せずに んだと喜々としました。

それは1999年の2月28日でした。ある通りを いて行くと、モスクが えました。正面に着き、扉を こうとすると、看板にこう いてありました。「女性用入り口」 女性用の入り口が何を意味したのか分からなかったため、モスクの反 に行けば男性用の入り口があるかも知れないと思い、 につけると急に してきました。私は宗教的なムスリムとは一度も出会ったことがなかったため、彼れが私と会った の反 が全く未知数でした。私は自分のユダヤ教徒としての出自を すべきか迷いました。深呼吸をして、扉を きました。

最初に目についた男性に「失礼します」と言いました。「イスラ ムについて 味があるのですが」と言い、案内してくれるのか、追い返されるのかと彼の反 を探りました。靴はもう棚にしまっていました。男性は 口一番、「すみません、私は英 ができません」とだけ言い、礼 堂に入って行きました。私は彼に付いて行きました。私は彼が私を置き去りにしたのかどうか分かりませんでした。周りを 回すと、信仰者たちがアッラへの崇 に ずいていました。それに感 しましたが、次に何をすればよいのか分かりませんでした。そうしていると、例の男性が他の信仰者たちと一 に ってきました。私は座りました。彼らは50人近くはいたでしょうか。彼らはほとんど一 に私に しかけてきました。それには 倒されましたが、 い はしませんでした。それはムスリムたちにとっていかにイスラ ムが重要であるかを示していました。彼らは「イスラ ム理解の 解付きガイド」をくれ、それにはシャハ ダ（改宗のための信仰 言）の仕方が っていました。それはこう 言することです。「ラ イラ ハ イッラッラ 、ムハンマドゥッ=ラス ルッラ （アッラ の他に神はなく、ムハンマドはアッラ の使徒である）。」

私には、その でその ができていました。カトリック教徒になるには9ヶ月、そしてユダヤ教徒になるにはさらに がかかるでしょう。しかしイスラ ムではその で即座に改宗することができるのです。

「本 ですか？」

に今そうしなくてもいいのですよ。」友好的なものの、注意深い同胞が言いました。私は きました。それはよく考える程大 かりなことなのでしょうか？ムスリムになることは 延すべきなのでしょうか？

局その日、私はムスリムになりませんでした。しかし、それは素晴らしい土曜日でした。そこでは世界中の同胞たちと出会いました。彼らは 々な出自ではあったものの、明白な共通の目的を持っていました。それはつまり、アッラ へ完全な 依をすることです。

私がムスリムになるのには1年以上かかりました。その年、私は家族の でブロンクスを通 中、 を受け、 丸は 部の ガラスを粉々にし、私の すれすれを横切りました。私は ひとつなく 事でしたが、事件 、そのことはそれ程 く心に留まることはありませんでした。

2000年の5月6日、私はいつも っているケンブリッジのモスク方面行きの に っていました。そのときは、アラビア を学 するための本を持参していました。当 はそうすることが私の哲学でした。イスラ ムを包括的に学びたかったのです。シャハ ダをする にはイスラ ム博士にでもなっているのを目指していたのかもしれませんが。そこでは、数ヶ月を合わせていなかったムスリムに出くわしました。彼は、私がもうムスリムになったのかと ねてきました。そしてしばらく会 をしました。彼は私が路上を いている に交通事故に会えば、非ムスリムとして死んでしまうのだと言いました。それは来世が地 になる可能性を意味します。彼は全く同じことを1999年の12月にも言っていたのですが、ブロンクスでの事件直 だったにも わらず、私はそれを真面目に受け止めることができませんでした。しかしそのとき、イスラ ム改宗をそれ以上 延することがもうできませんでした。

同じ日の午 、私はモスクでムスリムたちが正午の礼 を行うのを座って っていました。私は彼らの づく姿を凝 していました。それは 魔が拒否した姿 です。私はそれ以上、耐えられませんでした。もし、今ムスリムになればどうなるだろうかと思いましたが、私はもう 意していました。礼 の直 、私は同胞にムスリムになりたい旨を えました。これを いている 在、それから3ヶ月 ちましたが、シャハ ダをしたのは人生で最良の 断でした

。もっと早くそうしていればと悔やまれます。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/2099>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。